

ガラテヤ人への手紙 3 章をお開き下さい。もう一度アウトラインから皆さんにご紹介させていただきます。このガラテヤ人への手紙は全部で 6 章からなりますけれども、これをアウトラインによって 3 分割して見る事が出来ます。テーマは恵みでありますので、恵みを軸に 3 分割してアウトラインを皆さんにお届けしたいと思えます。まず 1 章 2 章が第一ブロックと言って良いと思えます。それはパウロの個人的恵みの体験について書かれております。そして第二ブロックが 3 章 4 章、今日見る内容です。それはパウロの教理的恵みの教えです。パウロの教理的恵みの教えです。そして第三ブロックは 5 章 6 章で、そこにはパウロ実践的恵みの適用についてまとめております。テーマは恵みです。恵みとは分不相応な者に与えられる過分な親切であります。当然受けるべきでない者に与えられる驚くべき神の好意・愛顧・祝福といったもの。それらは全て恵みと呼ばれるものであります。そして早速 3 章から見て参りたいと思えます。1 章 2 章のパウロの個人的恵みの体験をあとにして、ちょっとギアチェンジをいたします。3 章 4 章はパウロの教理的恵みの教えということです。

ここではパウロの懸念というもの、危惧というものが表明されています。パウロが心配していたこと、懸念していたこと、危惧していたことです。それはパウロがガラテヤ地方で宣べ伝えたイエス・キリストの単純な福音を複雑な福音に変えてしまおうとする輩<sup>やから</sup>が現れて、そのガラテヤのクリスチャンたちをたぶらかしている。すっかり迷わされ、そして騙され惑わされている人たちのことをパウロは懸念して、危惧して、この 3 章を書いております。「救われるためにはイエス・キリストを信じるだけでは足りない。不十分である。」と、この異端教師たちは説くわけであります。「割礼を受けなければ救われない。霊的クリスチャンになれない。神からの祝福を受けることが出来ない。」と、そのように説く異端教師たちのことをパウロは「割礼派の人々」とか「かき乱す者たち」、「偽兄弟」と呼んでおります。ユダヤ主義者と言っても良いと思えますし、行為義認の教えを説く異端教師、律法主義者たちと言い換えても差し支えありません。彼らは「ほかの福音」というものを宣べ伝えていたわけですが、「ほかの福音」というのは、全く質の異なる福音です。異質の福音というもの。つまり「信じるだけでは救われない。プラス割礼を受けなければ救われない。信仰義認、これでは不十分である。そこには人間の行いがプラスアルファされなければならない。行いによって人は義と認められる。」行為義認を彼らは説いていたわけですが。それはまさに異端、カルトの特徴であります。信仰プラスアルファです。十字架の上で完了されたイエス・キリストの完全な福音の働きが、未完了であるかのように彼らは教えるわけですが。それだけでは不十分であるかのように彼らは語り、そしてそれは偏<sup>ひとよ</sup>にイエス・キリストの成されたことを全否定してしまう。まるで十字架上のキリストの死が犬死であったかのような冒瀆するような教理。恵みをすっかり台無しにしてしまうような異端的な教えであったわけであります。そのような信仰義認を真っ向から否定する行為義人の教え、律法主義の教えを説く者はのろわれるべきだと、パウロは非常に強い言葉を使って彼らのことを糾弾しているわけです。そのような者たちの教えにガラテヤ人たちがすっかり魅了されてしまって、「割礼を受けた方がいいんじゃないか。割礼を受けた方が救いが確かなものとなる。割礼を受けた方がもっと霊的なクリスチャンになれる。異邦人の我々でも割礼を受ければユダヤ人になって、ユダヤ人でなければ救われないんだ。」と。ガラテヤ人たちは迷っていたわけですが。惑わされてきたわけであります。シンプルな福音を複雑化してしまうことは、sinful なことです。sinful というのは「罪深い」という英語の言葉なんですけど、シンプルな福音を複雑化するという事は、実に sinful なことだということを皆さんにも覚えて頂きと思えます。ただ、この単純明快な福音を複雑化してしまう異端の教え、カルトの教えというのは、そんなに難しいものではありません。それらを見分けるのは実に簡単です。「救われるためにはイエス・キリストを信じることと、割礼を受けることが必要である。」と。イエス・キリストを信じることだけでは足りない。プラス何らかの行いと。それを加えるという教え。それが異端の教え、カルトの教えです。「イエス・キリストを信じることと、私たちの教会に所属すること。私たちの組織に入ること。そうしなければ救われない。」とか、「イエス・キリストを信じることと、バプテスマを受けることがなければ、洗礼を受けなければ救われない。」これも非聖書的な異端

的な教えであります。「イエスキリを信じることに加えて、7つの秘跡を行なわなければならない。」とローマ・カトリックは教えます。「イエス・キリストを信じることと、安息日(土曜日)を守って礼拝を捧げなければならない。」とセブンスデー・アドベンチストという教会は説きます。「イエス・キリストを信じることと、プラス戸別訪問をして、伝道してものみの塔の冊子を配って回らなければ救われない。」と説くのはエホバの証人であります。「イエス・キリストを信じることと、プラスそれに加えて聖なる下着(ガーマント)を身に着けなければ救われない。」と説くのはモルモン教であります。それらはすべて非聖書的な教えであり、それは異端的な教えであります。私たちもそれらに注意しながらも、それらは簡単に見分けることが出来るということも覚えて頂きと思います。聖書の説く、パウロの説く福音、良い知らせ、グッドニュースは、「ただ信じるだけで救われる。恵みによってのみ救われる。そこに人間の行ないは何一つ加えられない。差し挟まれることはない。」単純明快です。

パウロはこの**3章4章**において信仰義認の教理、つまり恵みの教理というものを改めて解説するわけです。ここでプロテスタントの宗教改革とその改革神学者たちの神学、これを要約したラテン語の語句。“**5つのソラ**”というものを皆さんに紹介しておきたいと思います。“ソラ”というのはラテン語です。ラテン語で「～のみ」「～だけ」英語で言うところの“only”というのが“ソラ”というラテン語なんですけれども。“**5つのソラ**”、それはラテン語で表記されておりますが、まず第1番目の“ソラ”というのは「ソラ・スクリプトラ」。それは「**聖書のみ**」という言葉です。別にラテン語は覚えなくても結構です。それがプロテスタントの神学の特徴であります。第2番目の“ソラ”は「ソラ・フィデ」それは「**信仰のみ**」です。3番目の“ソラ”は「ソラ・グラティア」、「**恵みのみ**」。4番目の“ソラ”は「ソルス・クリストス」。これは「**キリストのみ**」です。5番目の“ソラ”は「ソリ・デオ・グローリア」。「**神の栄光のみ**」です。単純明快です。もうそれだけでいい。それのみでよしい。それだけで救われる。聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ、キリストのみ、神の栄光のみ。これがプロテスタント宗教改革と改革神学者たちの神学を要約した5つのラテン語の“ソラ”。これだけで救われる。これだけで充分。この単純明快な教理というものを、信仰というものを皆さんにもう一度確認をして頂きたいと思います。その上で**1節**から見て参ります。

『<sup>1</sup> **ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。**』“ああ愚かな”という言葉なんです、直訳すると「**考えのない、マインドのないガラテヤ人。理解、分別のないガラテヤ人。知能に欠けたガラテヤ人。**」非常に厳しい言葉です。何にも考えていない、マインドが全くないガラテヤ人。空っぽだということです。そして理解、分別のない知能に欠けたガラテヤ人。非常に厳しい言葉です。そんな彼らに対して、「**十字架につけられたイエス・キリストをあなたがたは見失ってしまったのか。**」と。この十字架につけられたイエス・キリストこそパウロの宣教メッセージの主題であり、それは唯一のテーマでありました。**第一コリント 1:17** から拾い読みして行きたいと思いますので、目で追ってみて下さい。『<sup>17</sup> **キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。それも、キリストの十字架がむなしくならないために、ことばの知恵によってはならないのです。**<sup>18</sup> **十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。**<sup>23</sup> **しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、**<sup>24</sup> **しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。**』**2章2節**『<sup>2</sup> **なぜなら私は(パウロは)、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。**』パウロの眼中にあったのは、十字架につけられたイエス・キリストだけだったということです。そしてイエス・キリスト、十字架につけられた方のことだけを追い求め、そしてその方のことだけを彼は宣べ伝えたわけです。十字架につけられたイエス・キリストがパウロにとってもうすべてのすべてだったわけです。その他のものは彼にとってはもう塵あくたに過ぎないと、**ピリピ人への手紙**でパウロはそのように表明しております。私たちが知ろうと心がけていること、伝えようと心がけていること、このために心がけていること。それは一体何でしょうか。パウロは、十字架につけられたイエス・キリストのみ。この方のみを追い求める。この方のために、この方のゆえに、この方によって生きる。それがパウロの人生でありました。A・W・トーマーという人がこういうことを言っています。「私は

聞きにくい退屈させるようなメッセージを沢山苦しみながら聞いたことがある。しかし、もし説教者が私にキリストを見せてくれれば、そのメッセージが長くて惨めであるとは決して思わない。」この彼の言葉はいつも私を勇気付ける言葉です。なぜならば、私は日本一長い説教をする男と自称しているからであります。「もう、カズのメッセージは長過ぎる。惨めだ。」と思われたら私は牧師を辞めたいと思います。私は別のことを語っているということになるわけです。むしろ長かろうと短かかろうと関係なく、そのメッセージの主題が十字架につけられたキリストであるならば、イエス・キリスト以外のことを語っていないとするならば、それはもう長さなど関係ないわけです。話術など関係ないわけです。イエス・キリスト、その方を見せるように語ること。それが牧師の務めであり、それがすべてのクリスチャンの務めであります。私たちは一体誰を見せようとアピールしているのでしょうか。自分がどんなに素晴らしいクリスチャンなのか。自分がどんなに偉大な人物なのか。それを人に伝えようとしていないのでしょうか。それを誇示しようとしていないのでしょうか。実際にガラテヤの教会に入り込んで来た割礼派の人々、異端教師たちは、イエス・キリストよりも自分たちが割礼を受けていて、如何に律法を遵守している霊的な信仰者なのか。それを懸命にアピールしながら、そして自分たちに栄光を帰そうとしていたわけです。そんな彼らにガラテヤ人たちは迷わされたわけです。この“迷う”という言葉は「たぶらかす」とか、または「魔法にかけられる」という意味があります。日本語のこの新改訳ではここには省略されてしまっているのですが、英語の欽定訳聖書の方には『真理に従うべきではないと迷わせる』と。若しくは「たぶらかす」「魔法にかける」というふうに訳出しております。この『真理に従うべきではない』というその“真理”とは、**2章**に出てきた「福音の真理」のことです。**2章5節、14節**に2度も繰り返されてきました。そこから外れていく教え、それはすべて異端である、カルトであるということです。単純なシンプルな福音を複雑化するような教え。信仰プラスアルファ。聖書プラスアルファ。恵みプラスアルファ。キリストプラスアルファ。神の栄光プラスアルファ。それらはすべて異端的な教えです。そのような異端的な教えに惑わされてしまう、迷わされてしまう、たぶらかされる、魔法にかけられたかのように。愚かになってはならないとパウロは言っています。

**2節**に、これはパウロからの質問状です。『ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。』私たちは皆信仰を持って聞いたことで救われた者であります。ローマ **10:17** に『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』と。イエス・キリストも再三にわたって「聞く耳のある者は聞きなさい。」と、おっしゃっています。福音書の中にも見られますし、黙示録の中にも7つの教会に対して「聞く耳のある者は聞きなさい。」イエスは繰り返し「聞きなさい。」と言っています。信仰を持って聞いたことで私たちは救われたわけです。律法を行ないによって救われたのではありません。**2節**に「あなたがたが御霊を受けたのは」とあります。この“御霊を受ける”という言葉は二重の意味を持っております。1つは新生体験。もう一つは聖霊体験です。新生というのは、新しく生まれる体験。born again の体験です。つまり回心して救われてクリスチャンになるという体験を、新生体験と言います。もう一つの聖霊体験。それはやはり聖霊を受けるというふうにも言うんですけども、これは救われる新生体験とは全く別の体験。後でそれは詳しく説明したいと思いますが、ですから“御霊を受ける”というのは新生体験と聖霊体験。2つの意味がある、二重の意味があって、それぞれ両方に当てはまるわけです。信じるだけで救われる。信じるだけで聖霊体験をするということです。

新生体験というのはヨハネの福音書 **20:22** にイエス・キリストが弟子たちに「聖霊を受けなさい。」という言葉によって表現されています。復活の主が弟子たちに「聖霊を受けなさい。」と、イエスが息を吹きかけたことで聖霊が彼らのうちに住んだわけです。それによって彼らは新しく生まれた者となったわけです。その瞬間から彼らは聖霊をうちに宿す者。聖霊が内住する、うちに住むという体験をして、そこから所謂私たちと同じクリスチャンとして歩むようになったわけです。それ以前は聖霊を彼らは受けていなかったんです。イエスは信じていましたが、旧約聖書時代の人たちと同じように、聖霊が私たちのうちに定住していたわけではないんです。でも、イエスが十字架にかかってすべての罪を処理されて、3日目によみがえってからは、罪が完全に贖われたのでイエスを信じる者の内には聖霊が住むことが許されて、彼らはその意味において救われて新しく生まれて新生体験をしたわけです。

一方で聖霊体験というのはそれとは違って、**使徒の働き 1:4** のところにイエス・キリストが“父の約束”と呼ばれているもの。そしてその後に**8節**もお読みします。『**4**彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。(この父の約束というのが聖霊のことです。)<sup>8</sup>しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。』これが聖霊体験です。新生体験とは別に聖霊の力を受けてどうなるかという、キリストの証人として大胆に証しをするようになる。キリスト弟子たちはローマ帝国及びユダヤ教当局者を恐れて逃げ隠れて閉じこもって臆病でいたわけです。ところが、この聖霊が上から彼らの上に臨まれると、聖霊が上から降って彼らに力を与えると、彼らは大胆な者に豹変するわけです。実際に続く**2章**というところでペンテコステのその日に、ちょうどイエス・キリストが復活されてから**50日**経ってから弟子たちはイエスに言われた通りエルサレムですっとこの父の約束を待っていたわけです。そしてイエスは実際に復活されてから**40日間**は弟子たちと共におられたわけですが、**40日目**に天にあげられて、そして**10日間**ずっとエルサレムのかつて最後の晩餐を祝ったその屋上の間において、**10日間**ずっと祈禱会をしていたわけです。そして**10日**経ったら**50日目**となって、ペンテコステの日に聖霊が彼らの上に降って、そして彼らはまさに大胆不敵な者に一瞬にして変えられて、習ったこともない他国の言葉で神をほめたたえ、そしてキリストを証しするようになったわけです。ローマ兵士がしようと、ユダヤの当局者がしようと、全くそんな人々を恐れることなく、彼らは大胆にキリストのことを証し始めたわけです。それが聖霊体験というものです。新生体験というのも聖霊を受けること。聖霊体験というのも聖霊を受けること。でも同じ体験ではないんです。新生体験の方は、聖霊が心のうちに住むんです。内住するとも言います。うちに住む体験。これが新生体験です。その一方で聖霊体験の方は、聖霊が上に臨む、上から降る。うちではなくて上です。それが聖霊降臨とも言います。**使徒の働き 2章**に記録されている現象であったわけです。

**使徒の働き 19:2** も参照して頂きたいと思います。パウロがエペソのクリスチャンたちに語った言葉です。『「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねると、彼らは、「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」と答えた。』パウロが訪ねたそのエペソのクリスチャンたちは、イエス・キリストを信じて、そして既に水のバプテスマを受けていた者たちです。そんな彼らに対して「信じたとき、聖霊を受けましたか。」当然イエスを信じた時彼らは聖霊をうちに宿す所謂新生体験は終えていたわけです。でも、聖霊が上から臨む、上から降ってくる聖霊体験はまだ済ませていなかったわけです。そんな彼らに対してパウロは「信じたとき、聖霊を受けましたか。」若しくは「信じて以来、聖霊を受けましたか。」と質問したわけです。この聖霊を受けるというのは、又は聖霊が与えられるというのは、“**聖霊体験**”若しくは“**聖霊のバプテスマ**”とも言いますし、他にもいろんな呼び名があります。“**聖霊充満**”と言う人もあれば、“**第二の祝福**”、“**第二の恵み**”などという用語を使う者たちもあります。いろんな呼び名があっても、どのように表現しようとも、新生体験とは別の、回心してクリスチャンとなるその体験とは別の聖霊体験というものが聖書にはしっかりと記されており、御霊を受ける、新生体験。そして聖霊体験。この**2つ**、両方とも共通していることは、行いによるものではなくて信じるだけで与えられるというものです。

旧約聖書の中でも**ゼカリヤ 4:6**に『**『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』**と万軍の主は仰せられる。』という言葉があります。よく私は皆さんにこれを引用して紹介しますが、聖霊の力によって、当時バビロンによって破壊し尽くされたエルサレム神殿を再建するその時に使われた言葉です。『**権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』**聖霊の力によってという、これがすべての信仰者に、すべてのクリスチャンに必要とされる神の力です。「御霊を受けるためには、聖霊のバプテスマを受けるためには、聖霊充満を体験するため、第二の祝福を体験するためには、これをしなければいけない。あれをしなければならぬ。」と説くのは異端であります。カルトであります。「御霊を受けるためには、聖霊のバプテスマを受けるためには、断食祈禱をしなければ受けられません。」とか、「異言を話さなければ受けられません。そのためには異言を話す練習をしましょう。セミナーに参加しましょう。」それはすべて異端です。「聖霊を受けるためには生活を正して、清くして禁欲しなければ受けられない。いろんな集会、クルセード、勉強会、いろんな集会に参加しなければ、出席しなければ受けられない、体験出来ない。絶叫するよう

に、張り叫ぶように祈り、賛美し、大泣きしなければ受けられない。」とか、そういう教えを説いているならば、それは非聖書的な教えであって、それは完全なる異端、カルトだとパウロは断じるわけです。聖霊体験、御霊を受けるという体験。それは人間の努力によって獲得するものではないのです。努力の賜物ではなくて、あくまで御霊の賜物です。「賜物」という言葉は「**カリスマ**」と言います。「**カリスマ**」とは「**恵み**」から派生した言葉です。「**恵み**」というギリシャ語は「**カリス**」。それに“マ”が付いて「**カリスマ**」と言うわけです。“マ”というのは「**目に見えない恵みが目に見える形で現れる**」ことを指す言葉なので、「**カリスマ**」というのは直訳すれば「**恵みの目に見える現れ**」のことを言います。そして、冒頭にも“**恵み**”の定義をご紹介したように、それは**分不相応な者に与えられる過分な親切**です。一生懸命頑張っている人に与えられるものではないんです。生活を清く正しくしている人たちに与えられるものじゃないんです。むしろ全然相応しくない者、当然受けるべきでない者に与えられるもの。それが御霊の賜物であります。それが聖霊体験であります。「私のような者には与えられるはずがない。私のような者は聖霊を受けることなどとても出来ません。なぜならば私はあれもやっていない、これもやっていない。私は全然相応しくないからです。」と思い違いをしている人たちがこの中にあるならば、是非悔い改めて下さい。あなたは未だに自分で頑張れば神様から祝福を頂けると、この割礼派の人たちと同じ考えを持っているからであります。

パウロは新生体験と同じように、聖霊体験もただ御言葉を聞くだけで、信じるだけで得られるものであると。これはイエスの言葉にも見ることが出来ますので、**ルカ 11:13** をお聞き頂きたいと思います。『**してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますよ。**』これはイエスの約束の言葉です。これを聞いて「信じます。」と言う人たちには聖霊が与えられます。あなたが何者でも関係ありません。イエスの言葉を額面通り「これは私への約束です。こんな私にも下さるならば、信じて受け取ります。」と、そう決意した者たち、そう表明した者たちには、必ず神は書かれている通りのことを、約束された通りのことをあなたのためにして下さいます。条件などついておりません。「清く正しい生活をしている聖人君子に与える。」とは書いてありません。「信仰歴を重ねた熟練したクリスチャン与える。」とも書いてありません。「神学校を卒業した者に与えられる。」とか、「苦行や修行を積んだ者たちに与えられる。」などとは1つも書いてありません。**ただ子供のように「欲しいです。下さい。頂戴。」**と言う人たちに与えられると書いてあります。

でも、中には「そんなことでいいんですか。それではあまりにも単純すぎるのではないですか。」パウロはそういう人たちに対して「**複雑にしてはならない。**」と。イエス・キリストの福音は単純明快なものです。これを複雑化する者たちに対して、パウロは怒りを燃やしています。「**愚かな人たち。一体お前たちはどこを見ているのか。十字架のキリストを見てみなさい。もしこれに何かを付け加えようとするならば、イエスの十字架の死はただの無駄死、ただの犬死。それは冒瀆である。**」と、だから怒っているわけです。

そして**3節**に目を移して下さい。『**あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。**(厳しい言葉ですね。)御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。』“**道理がわからない**”という言葉は実は**1節**の“**愚かな**”という言葉と原語は同じなんです。ですからパウロは“**愚かな**”という言葉を繰り返しているんです。先ほどもこの“**愚か**”という言葉は直訳で紹介しました。それは「**考えのない、マインドのない、理解・分別のない、知能に欠けたガラテヤ人。**」ということです。そんな厳しい言葉を**1節**、そして**3節**で2度もパウロは繰り返しているわけです。「あなたがたはどこまで考えがないのか(直訳すれば)、マインドがないのか、理解・分別がないのか、知能に欠けているのか。どこまで愚かなのか。」と。『**御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。**』とありますが、“**肉による**”という表現は、「**自分の力**」と言い換えて差し支えない言葉です。自分の力による。若しくは、自分の意志、自分の願望、自分の努力、自分の選び。それらが“**肉による**”という意味です。一方で“**御霊で始まる**”というのは、神の御霊の力、聖霊の力。“**肉による**”は自分の力、御霊は神の力、というふうに言い換えることが出来ます。

ヨハネの福音書 **1:12~13** にこう書いてあります。『<sup>12</sup>しかし、この方を(イエス・キリストを)受け入れた人々、すな

わち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。<sup>13</sup> この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。』私たちがイエス・キリストを信じて救われたのは、肉によるものではありません。すなわち自分の力、自分の願望、自分の意志、自分の努力によるものではなかったということです。血筋でもありません。クリスチャンホームだったから、ではありません。牧師の家庭だったから、ではないんです。キリスト教国に生まれたからではありません。自分で求めたから、追求したから、自分で懸命に聖書を調べ研究し、その研究努力の結果、ということではないと言っているわけです。「クリスチャンになるためには、あれもしなければいけない。これもしなければいけない。」又は「クリスチャンになってから、あれもしなければいけない。あれもしなければならぬ。規則や儀式。」これを付け加えようとするならば、それは単純明快な福音を複雑怪奇なものにしてしまう。異端的な教えの最たるものだということです。「あれもしてはいけない。これもしてはいけない。」禁止事項を設けて規則でがんじがらめにしてしまう。「酒飲むな、タバコ呑むな。耶蘇教は、ああ面倒な宗旨なりけり。」と昔日本でクリスチャンたちが迫害されていた時代、このような川柳が巷に流れたわけです。でも、もしそれが本当ならば私は耶蘇教など信じません。「酒飲むな、タバコ呑むな。あれもしてはいけない。これもしてはいけない。そうしなければ救われぬ。そうしなければ救いを失う。そうしなければ霊的になれない。そうしなければ祝福されない。」それが耶蘇教ならば(耶蘇というのは勿論イエスのことです。)、それがキリスト教ならば私も信じません。キリスト教信仰というものは、イエス・キリストの言われたこと、成されたことに対してただ単に「アーメン」と言うことです。「その通りです。それは真です。」それがキリスト教信仰です。パウロはガラテヤ 3:2 では“**信仰をもって聞いた**”という言葉を使いました。そして 3 節の方では“**御霊で始まる**”という言葉を使いました。これらはすべて人間の成す働きではありません。それはすべて神の成す働きです。それに対して「アーメン」と言うこと。「ああ面倒」どころではありません。これほど楽なことはないんです。これほどシンプルなことはないんです。誰にでも出来るものです。小さな子供でも、明日をも知れぬ虫の息のような老人・病人であろうと、誰にでも出来ることです。

そしてテキストのガラテヤ 3:4。『あなたがたがあれほどのことを経験したのは、むだだったのでしょうか。万が一にもそんなことはないでしょうが。』ちょっと皮肉めいたことも言っています。厳しい言葉に加えて、パウロは皮肉たっぷりと言っています。“あれほどのことを経験した”というのは、ガラテヤの人たちがこの単純明快なキリストの福音を信じたことによってどれほどの迫害を受けたのか、反対を受けたのか。あれほどの経験というのは、まさにその信仰義認の教理を受け入れたこと、恵みの教理を受け入れたことで彼らが被った様々な困難・試練のことを言っています。「信じるだけで救われる。馬鹿らしい。くだらない。そんなことだけで救われるなんてあり得ない。」と、そのように単純明快なキリストの福音を<sup>けな</sup>貶す者たちが必ずおられます。馬鹿にする者たちが必ずおられます。信仰のみ、恵みのみ、聖書のみ、キリストのみ、神の栄光のみ。先ほど 5 つの“ソラ”、5 つの“のみ”というプロテスタントの教理を皆さんには紹介しましたが、それらも「そんなもの馬鹿らしい。」それらを説いた宗教改革者たちは中世のローマ・カトリックの聖職者たちから見下されたわけです。「そんなことでよめられるはずがない。そんなことだけで救われるはずがない。あれもしなければいけない。これもしなければいけない。7 つの秘跡をしっかりと守り行なわなければ、それらを受けなければ人は救われぬんだ。」と、そのように単純明快な信仰を持っている人たちは常に律法主義者たちから見下され、貶され、嫌われるわけであります。そして異端呼ばわりされるわけです。終いには火あぶりの刑などにされてきたわけであります。そのように貶す人たち、嫌う人たち、見下す人たち、弾圧や迫害を加える人たちは、皆律法主義者、戒律主義者、割礼派の人たちと同じであることを覚えて下さい。なぜ彼らがそこまで嫌うのか。それは、彼らが実に傲慢だからです。おごり高ぶっているからであります。彼らは自分の力で自分を救うことが出来ると考えているわけです。そして、救いなど必要ないとすら考えているわけです。そんな彼らの前に「自分で自分を救うことは出来ません。完全にもう私はお手上げです。私には何の希望もありません。」と。でも、そういう人が信じるだけで救われるということになりますと、あれもやってこれをやって頑張っている人たち、あれもやらずにこれもやらずに身を粉にしていろんな犠牲を沢山の犠牲を払っている人たちからすると、許せないわけです。何も頑張っていない、何の働きもない、こんなつまらない者たちが、こんな汚れた者たちが、ただで救われるなんて。信じるだけで、何もし

ないで救われて、自由になって喜びを持って平安を持って希望を持って生きるなんて、救われてしまうなんて、絶対にあり得ないし許せない。それが割礼派の人たちのメンタリティーでありました。それが律法主義者たちのメンタリティーです。彼らは実に傲慢なんです。そして、とどのつまるどころ彼らは自己礼拝をする者たちです。自己義認する者たちは自己礼拝する者たちということ覚えて下さい。自分で自分を礼拝したいわけです。自分で何とでも出来ると思っている人たちは、自分を神としている人たち。ですから、自分は神ではないと、むしろ自分はただの罪人でちに過ぎない者で、そして救われ難いどうしようもない者であると。「私には救い主が必要です。私には慈愛に満ちた父が必要です。私には自分のために十字架に掛かってすべての罰すべての呪いを引き受けて下さる、何もかも私のために成し遂げて下さる救い主イエス・キリストが必要です。」と言う人たちを見ると、この律法主義者たちは我慢ならないわけです。自分が否定されたように聞こえるからです。自分の頑張りなど全く意味がない、無駄だというようなことを彼らは感じてしまうからであります。

D.M.ロイドジョーンズという人もこのような名言を残しております。「**信仰義認をはっきり理解出来ない人(すなわち恵みが全然分からないという人)の問題は、自分で自分を完全無欠な者としようと試みる**ところにある。」と。結局「信じるだけでは救われぬ。あれもしなければいけない。これもしなければいけない。」という律法主義者というのは、自分で自分を完全無欠な者にしようと日夜努力を惜しまない人たちです。いつも頑張っている人たち。でも、それが彼らの最大の問題なわけです。いくら頑張っても結局は長続きしない、挫折するわけです。人と比べて「私はあの人よりもマシだ。あの人よりも頑張っている。」そんなことで自分を慰めるだけです。それが唯一の気休めです。でも結局は神の基準には達しないわけです。結局は努力しても、その努力は報われないということです。最後はやはり惨めであって、頑張りが足りなくなったら、もう頑張れなくなったらすべてを失ってしまうという恐れが常に根底にあるわけです。それを紛らわすために、人に対して、他者に対して自分が出来ないことを押し付けて、そして彼らが出来ないのを見てせせら笑って、「自分の方がマシだ。自分の方が出来ている。良かった、あの人たちよりもマシで。あんな罪人みたいはどうしようもない人間でなくて良かった。」と。それがユダヤ主義者たち、それが律法主義者たちの考えであります。

3章5節。『**とすれば、あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇蹟を行なわれた方は、あなたがたが律法を行なったから、そうなさったのですか。それともあなたがたが信仰をもって聞いたからですか。**』パウロはこの議論にかなり執着しています。同じことを何度も何度も繰り返して確認を取ろうとしています。「**十字架につけられたキリストがあんなにもはっきりあなたがたの目の前に示されたのに、一体誰があなたを迷わせたのか。御霊を受けたのは律法を行なったからですか、それとも信仰をもって聞いたからですか。どうして御霊で始まったあなたがたが、肉よって完成されるというようなことが起こり得るんですか。**」そしてここで、5節のところで“方”と使われている言葉、これは代名詞なんですけれども、“方”「あなたがたに御霊を与えた方」「あなたがたの間で奇蹟を行なわれた方」、これは原文では“彼”という代名詞が使われています。この“彼”は、日本語の新改訳聖書を読む限りでは“イエス・キリスト”若しくは“神”を指すように訳出されております。でも、この“方”というのは、ただの“彼”ですから、これはイエス・キリストとは限らず、パウロ自身というふうにとることも可能なんです。イエス・キリストでも間違いありません。“方”と訳せばまさにイエス・キリスト、神のことを指します。でもこれを“彼”と単純に直訳するならば、これはイエス・キリストも指すけれども、パウロ自身を指すことも可能な解釈であります。実際に彼、パウロは、ガラテヤ地方のルステラという所で、生まれながらに足の効かない人のその足を奇蹟的に、超自然的に、瞬間的に癒して見せたわけです。それがまさにパウロが行った奇蹟の働きです。またはパウロは聖霊のバプテスマを授ける媒介者としての働きもしています。勿論その背後にいるのはイエス・キリストでありますけれども、イエス・キリストがパウロを通して聖霊を与えたり、パウロを通して聖霊の働き・癒しなど超自然的な奇蹟的な働きも成しておられるわけですが、実際にガラテヤ地方でパウロ自身がその働きを担ったわけですが、その際にはルステラで生まれつき足の効かない人を癒した際にパウロは一体どんなことをしたのだろうか。癒しを行う前にパウロは何時間も何日も何週間も断食して祈ったのでしょうか。そんなことは一切行っておりません。むしろパウロは、ただ信じて祈っただけです。ただ信じただけです。何もしていな

いんです。パウロが敬虔に振る舞って、熱心な宗教儀式や、また善行や、それだけの働きを担うに相応しい努力をしたわけではなく、ただパウロは信じて宣言しただけです。「神様に力強くパワフルに用いられるためにはこんなこともしなければいけない。あんなこともしなければいけない。それに相応しい行いをしなければいけない。」と考えているならば、それは大変な思い違いだということです。偉大な人物でなくても神は偉大に用いて下さるということを知って下さい。それは聖書 66 巻を通じて明らか真実であります。単純に、あなたが何者でも神を信じるならば神はあなたを通して大きな御業を成して下さるということを知って下さい。実際に最大の奇跡は、あなたが救われたという奇跡です。これ以上の奇跡はありません。死人がよみがえるよりもはるかに大きな奇跡、それはあなたがクリスチャンになったことです。それはあなたの働きによるものではありません。あなたの頑張り・努力は全く関係ない、無縁のところにあります。信じただけで神はあなたを通して大きな御業を成したのです。水がぶどう酒に変わるよりも、罪人のあなたが聖徒に変えられることの方がはるかに素晴らしい偉大な働きであります。それこそ真の奇跡だということです。

他にも**ヘブル人への手紙 11 章**というところに、そこには信仰の人々の殿堂と呼ばれる箇所があります。信仰人の殿堂入り。その信仰人たちを見て下さい。決して彼らは品行方正な敬虔な立派な信仰者たちとはとても言えない、むしろ欠だらけ、抜けだらけ、足りないところだらけ、失敗だらけ、おぞましい過去を持つ、<sup>すね</sup>脛に傷を持つ、そういう連中です。でも彼らは皆、信仰人として神は偉大な働きを彼らを通して成されたわけです。そこに共通している言葉、キーワードは、「信仰によって」、「信仰によって」、「信仰によって」、「信仰によって」です。「彼らの行ないによって」ではありません。「彼らがこういうことをやったから、ああいうことをやったから。だから神はこんなに大きなことをして下さった。その報いとして、その褒賞として。」そういう事は一切書いてありません。単純に神を信じただけです。それだけで神は大きなことを為さったということです。小さな人間でも、ちっぽけな者でも、ただ神を信じるだけで救われ、ただ神を信じるだけで偉大な奇跡的な働きを成すことが出来るわけです。人間が偉大であるかどうかは、神にとってはどうでもいいことです。その人が何者であれ、神様はご自身が偉大であるということをお示しになりたいわけです。それが、神に栄光を帰すということです。偉大な人など要りません。偉大な信仰も実は要らないんです。単純に偉大な神を信じる信仰で充分なんです。それはたとえからし種ほどの小さな信仰でも充分なんです。それだけで山は動くんです。それだけで山は海に移るんです。あなたが偉大であるかどうか、ハッキリ言ってどうでもいいことです。あなたが何をやっているか、そんなこともどうでもいいことです。あなたが如何に信心深いか、敬虔なクリスチャンか、そんなこともどうだっていいことです。単純にあなたは神を信じますか。信じるならば神はあなたを超えた、あなたの能力を遥かに超えた驚くべき偉大な御業を成して下さるということです。その結果すべての栄光は神にのみ帰せられるわけです。あなたが凄いから、ではないのです。凄くないあなたが、凄いことをやってのけた。それは偏<sup>ひと</sup>に神様の働き、神業でしかない。あなたの能力が素晴らしいから、こんな資格を持っているから、こんな経歴を持っているから、こんな頑張りをしたから、こんなに犠牲を払ったから、こんなに献金をしたから、こんなに奉仕を捧げたから。そんなものは全く不要であって、そんなものを度外視して神はご自身の働きを為さるということです。あなたが絶大な神を知れば、あなたはこの神に絶大な信頼を置くようになります。そして絶大な信頼を置くようになれば、神はあなたを通して絶大な働きを成して下さいます。ただイエスの足元に座って聞くだけでいいんです。多くの実を結びたいければ、ただイエスに繋がっていればそれでいいんです。「わたしにとどまりなさい。わたしはまことのぶどうの木であり、あなたがたは枝です。」と、そして「あなたがたはわたしを離れては何もすることができない。」とイエスはおっしゃいました。でも、イエスに繋がれば多くの実を結ぶことが出来ます。

次に**6 節**。『**アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。**』パウロはここでユダヤ民族の父アブラハムを例証に挙げました。割礼派と呼ばれる人たちは、律法主義者です。彼らはユダヤ主義者でありましたから、ユダヤ人の父アブラハムのことを大変重んじていたわけです。でもパウロはそれを逆手にとって、信仰義認の教理、恵みの教理、これを彼らに正統なものであると、聖書的なものである、それこそがキリストの真の福音であるということを説くために、あえてアブラハムという人物を例証に挙げたわけです。**創世記 15 章 6 節**を見て下さい。アブラハムの信仰が義と認められたということが書いてあります。信仰義認の教理は、既に聖書の最初の書、

創世記から確認出来るということです。これはパウロが説いた新奇な教えではないのです。新約聖書独自のユニークな教えではないのです。これは旧約聖書も、聖書 66 巻を通じての教えであるということです。『彼は(勿論これはアブラハムです。まだこの時点ではアブラムと呼ばれていますが、改名される前のアブラムは)主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。』信仰義認の教理は、既に起源の書と呼ばれる創世記に見られます。信仰義認の起源はどこにあるのか。必ずそれは起源の書、創世記に見ることが出来ます。何かのルーツ・オリジンを知りたいければ、源を知りたいければ必ず創世記を開いてみて下さい。そこに必ずルーツを見出すことが出来ます。その起源を見出すことが出来ます。そして、アブラハムは何を信じたかと言うと 15 章 1 節を見て下さい。『これらの出来事後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。』』という主のことばをアブラムは聞いて、それを信じたのです。ローマ 10:17 が言う通り『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』アブラムは信じたのです。ちなみに“信じる”という言葉は、ヘブル語で「アーマン」と言います。これは“アーメン”の語源です。ですから、主の言葉に対してアブラムは単純に「アーメン」と言ったんです。「聖書の言葉は全部アーメン、その通りです。そうなりますように。」信じるということは「アーメン」と言うことです。

テキスト戻って下さい。ガラテヤ 3:7。『ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。』神を信じる者、すなわち神の御言葉に対して「アーメン」と言う人たちは、皆ユダヤ人であろうと異邦人であろうとすべてアブラハムの子孫である。アブラハムはすべての信仰者の父、信仰の父であるからであります。そして、興味深いことにアブラハムは最初からユダヤ人ではないのです。実はアブラハムは外国人だったのです。かつて“ヘブル人”と呼ばれていました。“ヘブル人”というのは、ユーフラテス川の向こう側から渡って来た人。「渡って来る」という“渡来人”というのが“ヘブル人”の意味です。“渡来人”ということは、外国人ということです。外国人ということは、異邦人ということです。かつてアブラムは、カルデアのウルという所で(今のイラク、イラン地方で)月の神を拝んでいた偶像礼拝者だったとヨシュアは言っています。ですからアブラハムはかつては偶像礼拝者の家系で生まれ育った、外国の地で生まれ育った完全なるれっきとした異邦人だったわけです。その異邦人のアブラムが、聖書の神ヤーウェを信じたのです。天地万物を造られた主を信じて、主のことばを信じて、彼の信仰は義と認められた。それで彼は救われたわけであります。そして、そのアブラムの子孫は皆、ここではアブラムの信仰に連なる者と見なされて、そしてアブラムに対する神の祝福の約束は、すべてアブラハムと同じ信仰を持つ者たちにも継承されていく。有効なものとなっていくということがここに書かれております。

テキストの 8 節。『聖書は(勿論この聖書というのは旧約聖書を指しています。)、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げたのです。』先程も触れたように、信仰義認の教理はパウロの独自のもの、新約聖書のユニークな新奇の教えではなくて、これはもう古来から旧約聖書の中にアブラハムにおいても見出すことが出来る、言わば古典的な教理ということです。最初から示されていた、与えられていた、啓示されていたベーシックな教理ということです。そして、“福音”という言葉もここに使われています。“福音”と聞くと私たちはすぐに新約聖書のあの 4 つの福音書をイメージすると思いますが、実は“福音”単純に「良い知らせ」はもう旧約聖書の中にも告げられていたということです。創世記 12 章 3 節がこのカギ括弧の中の典拠なんです。『「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げた』というところ、それは創世記 12 章 3 節であります。主がアブラムに対して約束されたことば、それは『アブラハム契約』として名高い箇所です。創世記 12 章 3 節にこう書いてあります。『あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』アブラハム契約です。アブラハムの子孫を祝福する者、すなわち今日のユダヤ人を祝福する者は祝福される。今日のユダヤ人を呪うものは呪われる、ということでもあります。そして、ここでアブラムはこの契約に与り、その約束を信じて、その結果神はアブラハムを通して、アブラハムを使って力強いパワフルなマイティーな働きを成すことが出来たわけであります。アブラハムが偉大だったわけではありません。アブラハムが単純に主の言葉を信じたから

であります。もしあなたが主を信じるならば、「でも、私はアブラハムのようにではありませんよ。彼ほど偉大な人物ではありませんよ。」と、あなたは言うかもしれませんが、あなたは聖書を読んだことがないのですか。この男は自己保身のために、自分の命を救うために平気で自分の妻サラを人身御供に他国の王に差し出すようなとんでもない男なんです。「私の命を助けて欲しい。妻のサラよ、私のために人身御供になってくれ。異国の王のハーレムに入ってくれ。私の命を救うためには、レイプされたって構わないだろう。」と、そう言っているわけです。とんでもない男です。神の約束も何度も疑いました。そして沢山の失敗も繰り返した男です。アブラハムを見ると私は自分を重ねて見ることが出来ます。彼が実に身近でまさに等身大に見えてきます。彼でも救われたのか。こんな男でも主を信じて義と認められて、そしてこんな男を通して神は素晴らしいことを、偉大なことを為さったんだと。そして、こんな男とっていますけれども、こんな男が偉大な神を信じたことによって偉大な人物へと成長を遂げていくわけです。それを私たちも自分と重ねながら主に期待をするわけです。今は自分を見てしまえば、実に情けない、不甲斐ない、どうしようもないほど、救い難いほど、ひどい、汚い、醜い、罪深い者でしかない。全く非力で、無力で何も出来ない者だと思ってしまうかもしれませんが、でもただ神を信じれば、ただここに書かれていること主の言葉を信じるならば、主はあなたを通してあなたの想像を遥かに超えたことをして下さるということを、私たちは聖書を通じて教えられております。アブラハムはほんの一例であります。

テキストに戻って頂いて 9 節。『**9** そういうわけで、**信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。**』『**信仰による人々**』とは、ここにいる皆さんのことです。皆さんがもし彼と同じように主の言葉を額面通り、文字通り信じ受け取るならば、あなたもアブラハムの子孫です。あなたも信仰の人です。あなたが何者でも構いません。日本人であろうと、アメリカ人であろうと、韓国人であろうと、朝鮮人であろうと、何人でも関係ないです。異邦人だろうと関係ないのです。犯罪歴があろうとなかろうと関係ないのです。あなたの過去がどうであれ関係ないのです。主を信じるならば、あなたもアブラハムの子孫です。この聖書の言葉を神の言葉と信じ受け取るならば、あなたも信仰の人です。そしてアブラハムとともにあなたもアブラハムに与えられた祝福を受け取ることが出来るのです。

10 節に『**10** というのは、**律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**』なぜ律法は呪いになってしまうのか。神の好意、神の愛顧、神の祝福を獲得するためには、すべての律法を守り行なわなければならないのです。そして残念ながら私たちはすべての律法を守り行なうことが出来ないのです。神からの好意、神からの愛顧、神からの祝福を受け取ることが出来ないのです。つまりそれは呪いということです。カギ括弧の中の言葉は、**申命記 27 章 26 節**の言葉です。**律法の書に書いてある、すべてのこと。**“**すべてのこと**”これが大事な言葉です。一部のことではないのです。いくつかのことではないのです。**すべてのこと**です。100%ということです。律法のすべて、十戒のすべてを守り行なわなければ、その人は救われずに呪われるのです。その人は神の好意、神の愛顧、神の祝福を受けられずに呪われるということでもあります。

ヤコブ 2:10~11 にも同じことが書いてありますから、そこをお読みします。『**10** 律法全体を守っても、一つの点でつまづくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。<sup>11</sup> なぜなら、「**姦淫してはならない。**」と言われた方は、「**殺してはならない。**」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。』10 の言葉、『**モーセの十戒**』のすべてを遵守しなければ、あなたは呪われるんです。イエス・キリストはマタイの福音書 5 章の『**山上の垂訓**』というところで、「**あなたがたは人を殺してはならないと聞いている。しかしもしあなたがたが兄弟に対して腹を立てるならば、怒るならば、あなたは人殺しだ。**」と、兄弟に対して腹を立てる者は殺人罪に問われると、イエスは言われたわけです。「**また、あなたがたは姦淫を犯してはならないと昔から聞いている。しかし、もしあなたがたが心の中で情欲の目で異性を見るならば、女性を見るならば、男性を見るならば**（最近では男性が男性を見て情欲を抱く場合も増えてきましたから）、**いずれにしても異性だろうと何だろうと情欲の目で見れば、その時点であなたは心の中で姦淫の罪を犯したんだ。**」と、姦淫罪だとイエスは断じているわけであり、兄弟姉妹に対してムカっとしたら、あなたは人殺しです。「こいつめ、あいつめ。」と思っただけで。そして、心

の中で情欲の目で人を見るならば、あなたは姦淫罪に問われるわけです。大体守っているとか、ほぼ守っているとか、通用しないのです。「10の言葉のうち、十戒のうち9つまで守っています。」と言っても、1つの点、でつまずいているならば、破っているならば、あなたは律法違反者。そしてあなたは呪われるべき者だと、なってしまうわけです。100%でなければいけないのです。完璧・完全でなければいけないということです。アメリカには300万もの法律があるとされています。(本当かどうか分かりませんが。)でも、そのアメリカには法律が300万あって、したがって正しいアメリカ人は1人もいないと。正しいアメリカ人であることは不可能であるというようなことを、よくアメリカンジョークで言うんですけれども。私たちが神の律法を前にして、そのすべてを守り行っているかと問われたら、「とてもじゃないけれどもその大半を破っています。」とか、「逆に大半は守っていても、この点では、あの点では足りていません。破っています。」と。どの道いずれにしても私たちは律法違反者でしかないということです。完璧には、完全には守り行なうことは出来ないわけです。私たちは皆律法によっては呪われているわけです。

11節に『ところが(ところが、有り難いです。10節で終わったらもう何の希望もないわけですが。)、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。』これも旧約聖書からの引用です。どこからの引用かと言うとハバクク 2:4 です。『見よ。彼の心はうぬぼれていて、まっすぐでない。しかし、正しい人は(義人は)その信仰によって生きる。』とあります。信仰。\*印で欄外を見て頂くと『或いは「真実」』とあります。これも「アーメン」から来ている言葉です。キリスト教は、アーメン教です。昔はクリスチャンを揶揄して「あいつはアーメンだ。アーメンだ。」と言ったものですがけれども、若しくは「耶蘇。」と言ったわけですね。「アーメン、アーメン。」ばかり言っているから「アーメン」だと言われるわけですがけれども、でも私たちは確かに「アーメン」と言う者たちです。聖書の言葉を神の言葉として額面通り「アーメン」と言って信じ受け取っている者。それが真のクリスチャンです。このハバクク 2:4 は、背景としてはバビロンが侵略してきて、そしてとりまく状況は危うい。これではもう終わりだ。状況を見ただけで、もう失望・幻滅・がっかり・絶望という状態です。でも、そんな状況において神はハバククに対して「状況ではなくて、わたしを見なさい。」と言ったわけです。その上で『正しい人は(義人は)その信仰によって生きるのだ。』と、主は宣言して下さったわけです。私たちは今どこを見ているのでしょうか。周りを見れば、自分の状況を見れば、「もう駄目じゃないか。このままではいけない。何とかしなきゃ。何とか自分で。」でも、そんなあなたに対して主は「わたしを見なさい。今の取り巻きではなくて、今の状況ではなくて、わたしを見なさい。そしてわたしの言葉を聞きなさい。正しい人は、義人は信仰によって生きるのだ。」と。「もう死んじゃいます。」「大丈夫だ。わたしを信じなさい。信じる者は救われる。信じる者は生きるのだ。」と。「このままではもう駄目です。」「信じなさい。信じれば生きる。信じれば大丈夫。信じれば解決する。」と。

ユダヤ教のラビは、モーセは613もの律法を定めたと考えて、その613のうちの248は「こうしなさい。ああしなさい。」という肯定的な積極的な「こうすべきである。」という戒めであると。そして、残りの365は「ああしてはいけない。こうしてはいけない。」という否定的な禁止事項を説いている戒めであると。365というのは1年間に呼応しているので、毎日必ずしてはいけないということがあるという、そういうことでもあるわけですが、そのようにユダヤ教のラビはモーセの律法は全部で613あるというふうに定めたわけですね、数え上げたわけですね。そして、さらにラビたちはその613もあるモーセの律法を、一杯あり過ぎて混乱してしまいますとか、すぐ忘れてしまいますという人たちに対して、ダビデは詩編 15:2~5 において11にそれを要約したんだと、まとめ上げた。そして、11でも多いと私たちは思うかもしれませんが、それを預言者イザヤがイザヤ書 33:15 において6つにさらに要約した、短縮した。そして、6つもそれでも多いと言う人たちに対して預言者ミカがミカ書 6:8 で3つにまでさらに要約した、まとめ上げた。でも、3つでもまだ多いと言う人たちに対して預言者アモスが現れてアモス 5:4 で2つにまでさらに簡略化したと、要約したということです。そして、その2つもハバククが1つにまとめた。それがハバクク 2:4 です。モーセの律法のすべては、この1つの聖句に集約されている。それはすなわちハバクク 2:4『正しい人はその信仰によって生きる。』信仰義認の教理、すなわち恵みの教理。それがモーセの律法だと古くから古代のラビたちはそのように説いてきたわけですね。ですからこれはパウロの新奇の教えではないのです。パウロもこの伝統的な教えを聞いてきたわけでありま

す。

そして、この**ハバクク 2:4** は新約聖書の中に実に 3 回も引用されているんです。滅多に開かないこの**ハバクク書**。それはサタンが開かせないんです。知ってもらいたくないからです。でも、パウロは 3 回も引用しています。1 つはローマ 1:17。『なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。義人は信仰によって生きる。』と書いてあるとおりです。『書いてある』というのほどに書いてあるかという、**ハバクク 2:4** に書いてあるということです。もう 1 つは**ヘブル 10:38**。『わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのところは彼を喜ばない。』と。恐らく**ヘブル人への手紙**を書いたのは、私はパウロであると個人的に考えているので敢えてパウロと言わせてもらっていますけれども、**ヘブル 10:38** にもパウロは**ハバクク 2:4** を引用しました。そして 3 つ目が、私たちがテキストにしている**ガラテヤ人への手紙 3:11** であります。この 3 箇所において**ハバクク 2:4** は繰り返し引用されているだけではなくて、ローマ 1:17 では「**義人は信仰によって生きる。**」の、“義人”という言葉にパウロは着目して、その“義人”に焦点を当てて、その“義人”に力点を当てて引用しています。そして**ヘブル 10:38** では、パウロは「**義人は信仰によって生きる。**」という聖句の“信仰”という言葉に焦点を当てて、力点を当てて強調して引用しています。そして**ガラテヤ 3:11** の方では、パウロは「**義人は信仰によって生きる。**」“生きる。”という言葉に焦点を当てて、強調点を置いて引用しています。

ですから**ハバクク 2:4** が 3 回にわたって新約聖書に引用されていますけれども、それだけ焦点・強調点を分けてパウロは引用しています。義人・信仰・生きる。この 3 つです。特に**ガラテヤ 3:11** では“生きる。”という言葉に焦点・力点が置かれております。私たちは生きる者です。死んだ者ではありません。幸せに生きる者。実り多い充実した人生を生きる者。喜び・平安のうちに生きる者。縛られずに自由にはつらつと生きる者。満たされて生きる者。それが私たちクリスチャンです。そのためには、あなたは信じなければいけないのです。信じる者は生きるのです。信じる者は幸せに生きるのです。信じる者は充実した人生を生きるんです。信じるものは喜び・平安・自由・愛のうちに生きるんです。律法主義は人に死をもたらします。呪いをもたらすのです。律法主義は自由を奪い去るものです。再び奴隷に陥れるものであります。

マルティン・ルターはこの**ガラテヤ書**に出会って律法主義から解放されて自由となって、そして宗教改革を断行したと言われておりますけれども、かつてのローマ・カトリックの聖職者であったルターは、苦行によって、修行によって、自分の頑張り・犠牲によって霊的になれると、そのように考えて膝をついて体に痛みを与え、むちを与え、傷だらけになって、ボロボロになって、汗水垂らして歯を食いしばって、「何としてでもこれで霊的になろう。これで幸福になろう。これで平安だとか喜びで満たされよう。」と自分の律法の行ないによってそれを獲得しようとしていたわけです。血のにじむような努力をしていたわけです。でもそれによっても、ルターは結局は望んでいたものを得られなかったわけです。いくら頑張っても平安を得られない。いくら頑張っても充実した人生は生きられない。死んだようだったわけ。

でも、信じるだけで救われるんです。信じるだけで生きるんです。そして、そこには自分の頑張り・行ないは 1 つも付け加えられないということ。それを知るならば、それを悟るならば、私たちはパウロがこの**ガラテヤ人の手紙**の中で約束されているキリストにある自由を満喫することが出来るわけです。あなたは何もしなくていいんです。頑張る必要はないんです。何にも努力しなくていいんです。ただ信じるだけであなたは救われるんです。ただ信じるだけであなたは御霊を受けるんです。ただ信じるだけであなたは満たされるんです。毎朝早く起きてディボーションを行なわなくてもいいんです。「つまり、寝坊したっていいんですか?」いいんです。また毎日毎日聖書を通読したり、祈ったり、教会の集会にすべて参加しなくても、バイブルスタディーに来なくても、それでもあなたは霊的になれると。ですから霊的になるためにはそれらをしなくてもいいんです。何もしなくても構わないんです。私のやることによって、あなたのやることによって、私があるが霊的になるということはありませんということをもう一度知って頂きたいと思えます。

ローマ 4:5、これも以前引用しましたがけれども、もう一度お読みしたいと思います。『何の働きもない者が、不敬虔

な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。』何の働きもない不敬虔な者です。「寝坊しちゃいました。今日もディポジション忘れてしまいました。ご飯を食べる前に食前の感謝の祈りも忘れてしまいました。忙しくて聖書を読む暇がなかったんです。結局友だちとの約束があって、旅行の予定があって、趣味が、大事なことが、あのことが、このことがあって、結局私は教会にも行けませんでした。」そういう人が信じるだけで義と認められると言っているんです。「じゃあ、今日から私は何もしません。」と開き直るかもしれませんが、勿論聖書をよく読んで見て下さい。罪が増し加わる場所に恵みも増し加わりますけれども、だからと言って「じゃあ、ますます罪を犯していいのか。やりたい放題やっていいのか。」ということにはならない。そんなことは絶対にないとパウロは言っていますけれども、でもこの過激とも聞こえる、この革命的とも聞こえるパウロの教えにしっかりと耳を傾けて下さい。しっかりと心を留めて下さい。注意を払って下さい。あなたは何もしなくても靈的になれるんです。ただ信じるだけでいいんです。あなたの努力は全く、あなたが靈的になるためには全く1つも必要ないということ。これは真理であります。やらなきゃいけないと思っているならば、どこか心の片隅で、頭の片隅でやらなきゃいけないと思っているならば、それは割礼派のメンタリティーです。それは律法主義のメンタリティーです。そうじゃないんです。やらなきゃいけないからやるんじゃないんです。そうではなくて、やりたいからやるんです。それがキリストにある自由にされた者のメンタリティーです。それが恵みに生きる者のメンタリティーです。それが信仰義認によって生きる者の生き方です。やらなきゃいけない、じゃなくて、やりたくなっちゃうんです。誤解を恐れずに言うならば、もうやるほかないんです。やらざるを得ないんです。あまりにもその恵みが大きいから。あまりにも神が素晴らしいから。こんなにも良くしてもらっているから。こんなにも愛されているから。だから応えたいんです。それは英語で言うところの responsibility(責任)ではなくて、respons(応答)です。恵みに対する応答、それが行いとして現れてくるわけでありまして。やらなきゃいけないからじゃないです。応答したくなるからです。応えたいんです。やりたいんです。ディポジションを毎朝毎朝早く起きてやらなきゃいけないのではないです。そうでないと立派なクリスチャンになれないと思ったら大間違いです。そうじゃなくて、毎朝どんなに疲れていてもそうしたいんです。そうしたくなるんです。そうせざるを得なくなるんです。勿論朝起きなくても別に罪悪感などありません。「ああ、朝起きられなかった。じゃあ昼休みに。じゃあおやつ時間に。じゃあ寝る前に。」そうしたくなるんです。自発的に喜びを持って、自由に強制されてではなくて、それは重苦しいことではなくて、楽しみながら出来るんです。好きな時に。

これをちょっと分かりやすく皆さんに卑近な例を挙げて説明したいと思います。今お話していることは愛し合っている夫婦に例えられることだと考えて下さい。ポイントは、愛し合っている夫婦に例えられるということです。どういうことかと言いますと、「電話してね。」と言わなくても愛し合っている夫婦ならば必ず電話をします。「帰る前には必ず帰るコールを。」なんてことをいちいち言わなくても、念を押さなくても、釘をささなくても、メールを送らなくても、愛し合っている夫婦ならば何も言わなくても電話してきます。別に帰る前でなくても、いきなり電話してきます。「どうしたの?」「ただ君の声が聞きたかったから。どうしているかと思って。」愛し合っている者たちならば、昔を思い出して下さい。若かりし頃を思い出して下さい。恋愛に夢中になっている頃を思い出して下さい。どんな時でも片時も忘れたくない。今頃あの人は何をしているだろうかな。思い巡らしては暇さえあればラブレターを書こうとする、電話をかけようとする。常に繋がっていたい。常に話がしたい。愛し合っている夫婦ならばそうですね。自然に気が付いたら手をつないで歩いているわけです。「一緒に手を繋いでよ。」なんて言わなくても、「繋いで下さい。」なんて頼まなくても、愛し合っている夫婦ならば気が付いたら自然にお互いの手を握り合っているわけです。愛し合っているならば「電話ちょうだい。」なんて言わなくても電話してくるんです。自然に手が繋がっているんです。愛し合っているから。愛されているから、言われなくてもそうするんです。嫌々ながら渋々、命令されたから、念を押されたから、「そうしろ。」と言われたから、だからやっているんじゃないんです。「しょうがない、忙しいのに。」帰る前に妻に電話をするとか、出先で電話をするとか。それは愛し合っていない夫婦のやることであります。でも、愛し合っているならば実は命じたり強要したりするよりも、実は多くのことをするんです。愛は律法の行ないよりも多くを行うということを知って下さい。ですから律法主義者はいっぱいいろんなことをやっているように思うかもしれませんが、実のところ愛によ

て生きている者たちは律法の行ない以上のことをしているんです。自分の能力以上のことをしてしまうんです。そうしたくなるんです。「もう私はいろんなことをやってきました。もう律法主義で疲れ果てました。だから私は何もしません。」と、たまにそういう人がいます。でもその人たちは実のところ全く愛を知らない人たち、恵みを全く体験していない人たちです。むしろ逆なんです。今までいろんなことをやってきたとあなたは自負心からそう言っているのかもしれませんが、愛によって生きる者は律法の行ないなど取るに足らない、そんなものはいしたことがない、その程度のこととして、むしろそれ以上のことをするんです。律法の行ないなんか少ないとすら思うんです。全然出来ていなかったとすら思うわけです。愛によって生きるならばもっとしたくなるんです。「もっとしなさい。もっとやりなさい。」と律法は強要しますが、愛はそんなことを言われなくてもそれ以上のことをやってのけてしまうんです。自分の能力以上のことをやってのけるんです。律法主義は自分の能力以内のことしか出来ません。ですからいつかアップアップになって疲れて、「もう出来ません。」と。お手上げ、もう白旗ということになります。でも、愛はそうじゃないんです。出来ないと思うことすら出来てしまうんです。無理だと思うことすら行なってしまふ。それが愛によって生きる、それがキリストにあって自由にされている者、それが恵みによって生きる者、信仰義認の生き方です。表現はいろいろあって構いませんが、その違いだけは明確にして頂きたいと思います。この線引きだけはしっかりと頂きたいと思います。愛する者から受け取ったラブレター。明日読もう、とは思いません。すぐにでも受け取ったら開こうとします。仕事中でも、忙しくてでも。勉強中でも。愛する者から受け取ったラブレターならば、すぐにでもあなたは読もうとします。でも、愛していないならば、「今忙しいから、そのうちに。そんな暇はないんだ。やりたいことが他にもある。見たいテレビが他にもある。だからこんなラブレター、読んでいる暇がありません。明日になったら読みます。でも明日になったらまた仕事が入って、またそのうちに。」でも、愛しているならばそんな事は絶対に思いませんし言わない。むしろすぐにでも開いて、そしてギリシャ語へブル語を学んでこの意味は何だろうかとか、行間すら読もうとします。時間をじっくりとかけて何回も何回も繰り返し繰り返し読もうとします。愛しているならばラブレターをかけたえのないものとしてしっかりと肌身離さず、1回読んだらそれで充分とは言わずに何度も何度も読むわけです。特に遠距離で暮らしているならば、遠距離恋愛ならば、そうするはずですが、是非、私たちが手にしているこの聖書も神からのラブレターだということを知って下さい。読まなきゃいけないんじゃないんです。毎朝早く起きて疲れていても、早起きしてやらなきゃいけないことじゃないんです。「いつかそのうちに読む。忙しいから今はまだ。明日読もう、来年読もう。」というようなものじゃないということを知って下さい。ちなみにマルティン・ルターは、このガラテヤ人への手紙を自分の妻に例えたという話は皆さんに前にしました。彼にとってこのガラテヤ人への手紙はラブレターに他ならなかったわけです。彼はこのガラテヤ人への手紙を自分の妻のように愛したと言っています。そして、私はこの手紙と結婚したとすらルターは言っているわけです。あなたはこのラブレターを受け取って、どのようなアクションを取ろうとしているでしょうか。

12 節に今度は目を移して下さい。『しかし律法は、「信仰による。」ではありません。「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」のです。』律法は行ふもの。逆に信仰は、ただ聞くものです。レビ記 18:5 にはこう書いてあります。『あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行なう人は、それによって生きる。わたしは主である。』律法は行ふことを求め、信仰は聞くことを求めます。イエス・キリストは十字架の上で「完了した。」と宣言して下さいました。すべては完了したと。イエス・キリストが、私たちには出来ない、成し遂げる事の出来ない、成就することの出来ない律法をすべて完了した。私たちが支払い切れない罪の罰金というものをすべて完済して下さった。ギリシャ語で“完了した”というのは“テテラストイ”と言いますが、それは借金を全部返す、完済という言葉。代わりに払っているのが“弁済”というふうにも表現出来ます。私たちには到底支払えないその罪の借金、膨大な借金です。それをイエスが全部清算して下さいました。そのイエスの成されたことを覚える聖餐式はまさにもう一つの清算式です。イエスが全部罪の聖餐をして下さった。完了したんです。もうそれには付け加えるものは何もないんです。「完了した。」という言葉は聞くだけでいいんです。「信じます。分かりました。イエス・キリストが私のすべての罪をご自身の尊い命の代価によって全部完済して下さいました、弁済して下さいました。だから私はそのことを信じます。そしてそ

の者は義と認められるということを信じます。」「義と認める」というのは法律用語です。「罪のない者として見なす」ということです。また“義と見なす”という言葉も聖書に使われていますが、それは数学用語であり金融用語です。「キリストの義というものがあなたの銀行口座の中に入金される」という意味です。借金だらけの完全に霊的に破産していたあなたの口座にキリストの義が振り込まれるんです。それは天文学的な数字であります。キリスト・イエスにある栄光の富というものであります。あなたが稼いだものではありません。あなたの報酬じゃないんです。何かをした値じゃないんです。給料じゃないんです。敢えて言うならば、罪から来る報酬は死ですから、私たちの給料は“死”でしかなかったんです。永遠の死、地獄が私たちの受けるべきものだったのです。呪いしかなかったんです。でも、すべてこれらの膨大な負債をイエス・キリストが十字架の上で肩代わりし下さったわけです。そして、イエスがもう「完済した。」「完了した。」とおっしゃったならば、私たちは「その通りです。」と「アーメンです。」と言って、その言葉を聞いて信じるだけです。信仰はただ聞くだけなんです。律法は行うことを求めます。「キリストの十字架の働きにまだなお何かを加えよう、付け加えよう。割礼を受けなければ、洗礼を受けなければ救われない。異言を話さなければ聖霊を受けられない。聖霊のバプテスマを受けるためには、あれもしなければいけない、これもしなければいけない。」それはすべて異端です。カルトです。律法はやたらめったら行いたがります。聞かずに、行う。それが律法主義です。信仰は聞くことから始まるんですけれども、信仰は聞いたら行ないます。ヤコブは言いました。行いのない信仰は死んだものであると。ですから行ないが全くないではありません。何もしなくてもいいんですけれども、しなきゃいけない、という意味です。したいからするんです。信仰には確かに行いが伴うわけです。律法主義は、聞かずに行うんです。でも恵み主義は、聞いて行うんです。聞いても行なわない、これはまた新たな問題ですけれども。聞いたら行う、それが真の信仰です。

13 節。『キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。』律法をすべて遵守出来れば、1つも漏れなく例外なく完全に行うことが出来るならば、勿論その人は義と認められ祝福されるわけです。でも私たちにはそれは出来ないわけです。義人はいない。1人もいないわけです。ただ1人の例外は、勿論イエス・キリストであります。イエス・キリストは律法を廃棄するためではなくて、律法を成就するためにこの世に来られ、そしてイエス・キリストは私たちに出来ないことをすべて成し遂げて、完了して下さったわけです。イエス・キリストだけがすべての律法を漏れなく守り行い、そしてその上で罪の無い方として私たちのすべての罪をあゝの十字架の上で負って、呪いを私たちに代わって受けて下さったわけです。ただ事実としては、律法をすべて行うことが出来れば、誰でも確かに義と認められます。

これについてはローマ 2:12~13 が、パウロが証明している箇所です。『<sup>12</sup>律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。<sup>13</sup> それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。』律法を行なう者が正しいと認められると、パウロはこれは認めています。でも、現実には誰も律法を守り行うことは出来ないということです。ある金持ちの青年役人に対して、青年実業家に対してイエス・キリストはマタイの福音書 19:16~24 でこう言われました。『<sup>16</sup>すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには（救われるためには）、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」<sup>17</sup> イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら（救われたいならば）、戒めを守りなさい。」（これが出来れば確かに救われるわけです。）<sup>18</sup> 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。<sup>19</sup> 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」<sup>20</sup> この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」<sup>21</sup> イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」<sup>22</sup> ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからであ

る。<sup>23</sup> それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。<sup>24</sup> まことに、あなたがたにもう一度(強調して)、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」(言い換えれば、不可能だと言っているわけです。)』自分の努力では、頑張りでは、自分を救うことは出来ないんです。どんなに良い人でも、人格者と呼ばれる人でも、その人は自分の力だけで天国には入れないと言っているわけです。「この人は立派な人です。クリスチャンよりも立派なことをやっています。良い人なんです。」私たちは平気でそういう言葉を使います。良い人、立派な人、社会的地位のある人とか、社会に貢献している人、品行方正な人、そういう人を私たちは「良い人」と言います。でも神の目には、良い人なんていないんです。間違ってもそんな言葉を使ってははいけません。「でもこの人はクリスチャンではないけれども、良い人なんです。」良い人なんていないんです。イエス・キリストを信じていなければ、1人も良い人なんかいないんです。義人は1人もいない。神の目に正しい人は、イエスを信じる以外には、イエスを信じている者以外に1人もいないと言っているんです。ですから律法は私たちには決して義を与えない、祝福を与えないということです。逆にむしろ却って呪いしか与えないということです。自分で正しく生きようとすればするほどあなたは呪われてくることを経験します。特に真面目なタイプの人。一生懸命頑張って正しくあろう、人にも良く思われようと頑張る人たち、彼らはますます呪いのスパイラルに入り込んで、だんだん鬱っぽくなってきます。頑張っても頑張ってもうまく出来ない。自分の理想通りにならない。そうすると最後にはもう絶望的になって、「もう死にたい。死ぬしかない。」自殺願望まで抱いてしまうわけです。「二度とこの様なことはしません。次からは頑張ります。ちゃんとやります。」そういう人は試してみれば分かると思いますけども、大抵はうまくいかないわけです。自分で頑張れば頑張るほど律法の行ないを持って自分を義としようとする者は必ず呪いのスパイラルに自分が陥っていくということを遅かれ早かれ知ることになります。

しかし、イエス・キリストはその呪いをすべて十字架の上で負って下さった、引き受けて下さった。私たちが受けるべき呪いを何もかもあの十字架の上でイエスが受けて下さったということを良い知らせとして聞かされたわけです。グッドニュースとして、福音として、私たちも耳にしたわけです。それを信じればあなたはその呪いから解放されるということです。もう頑張らなくなっていていいんです。もう鬱にならなくていいんです。もう自殺願望なんか抱かなくなっていていいんです。「何とかしなきゃいけない。人から良く思われなきゃいけない。良い子でありたい。」そんなことはもうどうだっていいんです。最初の人アダムは罪を犯して、その結果呪いを受けました。呪いが宣告されたわけです。「苦しんで糧を得なければいけない。パンを得なければいけない。額に汗水たらしていばらとあざみの中頑張らなきゃいけない。頑張らなきゃ糧を得られない。祝福を得られない。」と、呪いを受けたわけです。

しかし、ここに最後のアダムが現れて、そしてあの最後の晩餐の席でパンを裂いて「これがわたしがあなたがたのために裂いたパンです。」と。そしてイエス・キリストこそが、私たちの糧そのものになって下さった。パンそのものになって下さった。「これを食べて生きよ。」と。ただで与えられているんです。「これを食べなさい。信じてこれを受け取りなさい。額に汗水たらして、いばらとあざみの中一生懸命血の汗を流しながら頑張らなくなっていていい。なぜならばわたしがゲッセマネの園で額に汗を流し血を流し祈ったから。わたしがあのゴルゴダの丘で十字架の上で額にいばらを生えさせてすべての呪いを引き受けたから。だからあなたはもう頑張らなくていいんだ。あなたはもう呪われた者ではない。なぜならばわたしがすべての呪いを引き受けたから。わたしがあなたに代わって罪となったから。呪いとなったから。」第二コリント 5:21 に書いてある通りです。『神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。(イエス・キリストを呪いとされました。)それは、私たちが、この方において(キリストにおいて)、神の義となるためです。』グッドニュースです。福音です。

でも、この福音とは異なる“ほかの福音”を宣べ伝える者は、パウロに言わせれば「のろわれるべきです。」アナテマと言われているわけです。「信じるだけでは不十分。割礼を受けなければならない。これをしなければいけない。あれをしなければいけない。あれをしてはいけない。これをしてはいけない。」付け加える者は呪われるべきだと。

『書いてあるから』ということがガラテヤ 3:13 のカギ括弧の中の引用句となっていますが、申命記 21:23(『その死

体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる地を汚してはならない。』の引用であります。これも旧約聖書から取られています。「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」かつてパウロはサウロと呼ばれていましたが、その頃彼は教会を迫害していました。どうしても我慢ならなかったんです。なぜならば木にかけられた者が、救い主、聖書の約束のメシヤ、キリストなんて我慢ならない。「神がのろわれるなんてあり得ない、あつてはならないことだ。そんなことを教えたり説く者は、伝える者は絶対にこの俺が許さん。」と言って、彼は積極的に迫害のまさに急先鋒となって、男も女も子供であろうと縛っては、牢にぶち込もうとしたわけです。この世からキリスト教という神を冒瀆する宗教を完全に撲滅しようとしたわけです。ところが、そんなパウロも復活の主に出会ったわけです。そして目からウロコの体験をして、目が開かれたわけです。自分こそが木にかけられて然るべき者だった。サウロはパリサイ人の中のパリサイ人。律法主義者の中の律法主義者。サウロの右に出る者は他にないほど、彼は自己義認を表明していた者だったわけです。行為義人、それがパウロの宗教だったわけです。でも結局のところは、復活の主と自分を比べてしまえば自分などは木にかけられて然るべき者、呪われて永遠に滅びて然るべき者だということに彼は気付いたわけです。実のところ内心は気付いていたわけです。律法主義者は皆気付いているんです。「自分たちは立派にやっている。十分の一献金もやっている。奉仕もやっている。あれもこれもやっているし、あれもこれもやっていない。」そういうことを鼻にかけて誇りにして、そして他の人と比べては「自分の方が上だ。自分は完璧だ。あの人たちはなっていない。」そういう相対主義の中で律法主義者たちは生きて、そして気休めをそこに見出しているわけですが、でも、彼らには平安がないんです。常に不安があるわけです。「これでは足りない。自分は出来ていない。」でも、それを認めたくないわけです。でも、サウロは復活の主に出会って、そして絶対的な基準を前にして彼は「我こそは木にかけられるべき者である。でも、そんな私のためにこの方は罪がないのに木にかけられて私の呪いのすべてを引き受けて下さった。」まさに目からウロコだったわけです。「律法の行いでは自分を救うことは出来なかったけれども、この方は完璧な方としてすべて律法を守り行い、そして私の罪の罰を、呪いを、すべてあの木の上で負って下さった。」サウロはそれを信じて救われたわけです。そしてパウロとなったわけです。他にも木にかけられて呪いの死を迎えた者たちは聖書の中に登場しております。アブシャロムという人、木にかけられて死にました。イスカリオテのユダという人も木にかけられて死にました。確かに彼らは罪人でありましたけれども、私たちが想像するような罪人とはちょっと違うと思います。木にかけられて呪われて然るべきと言うような大きな大それた罪を犯したとはとても思えない。アブシャロムは見た目もハンサム。人望も厚かった。非常に有能な人物でもありました。むしろ彼は被害者と言えるかもしれません。妹のタマルを義理の兄弟に犯されてしまった。その問題処理を父親のダビデがちゃんとやらなかったので、アブシャロムが兄としてきっちり方を付けた、筋を通した。つまりアムノンを処刑したわけです。父親がやらなかったから、罰しなかったから。イスカリオテのユダはどうでしょうか。金入れから金を盗んでいましたけれども、でも木にかけられて呪われるようなことを彼はしたでしょうか。何人も人を殺したとか、通り魔、レイプ魔、児童虐待するような者、麻原彰晃のようなカルトの教祖、無差別テロを行うようなイスラムの過激派。そういう人たちと比べるとイスカリオテのユダは「そこまでは、木にかけられて呪われるような死に方をするようなことを彼は特別していない。金入れから金を盗むぐらい、税金をごまかすぐらい別に、落ちているお金を拾うぐらい、別に人の物をちょっとちょろまかすぐらい。」そのぐらいは誰でも私でもあなたでもやっていることです。でもこのアブシャロムとイスカリオテのユダにおいて共通していることは何か。それは救いを拒否したということです。信じなかったということです。立派な人物であろうと、弟子たちからの信任を受けた者であろうとも。イスラエル中の羨望の的、新たな王、新たな英雄、そのように見なされる者であろうと、人望の厚い者だろうと、それでも神の救いを拒否するならば、木にかけられて呪われるべきだということです。法的に見るならば、人間的に見るならば、世間の目で見ると、特別十字架につけられるような、木にかけられて殺されるような凶悪な犯罪は犯していないかもしれない。でも、最大の罪は何かということ問われるならば、それはイエス・キリストを信じないという罪です。良い人でもです。社会に貢献している人でもです。チャリティーに何億円とお金を差し出す人でもです。そ

れでもキリストを拒絶するならば、その人にはもう呪いしか残されていないんです。呪いを解消するのは、又はして下さるのは、十字架につけられたイエス・キリストだけであるということです。それ以外に呪いから免れる道はない、救われる道は他にないということです。つまりイエスを拒否するならば、もう呪いの他にないということです。イエス以外の救いの方法、律法の行ないによって義と認められるよう、行為義認に奔ろうとするならば、律法主義に奔ろうとするならば、もうその人には呪いしか残されていないということでもあります。

14 節に『このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。』同じことが繰り返されていますけれども、結局はすべてキリストのおかげだということを信じ受け取る者は救われるわけです。アブラハムに対する祝福を受け取ることが出来るということです。

15 節に『兄弟たち。人間のばあいにたとえてみましょう。人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません。』契約、これは法律においても無効になることはない。一度結んだ契約ならば、法的にそれは無効にされない。一度結んだ契約ならば、後から何かを付け加えたりすることは出来ない。契約は契約通り、書かれている通り、文字通り履行されるものでなければならぬと法律でそのことは定められている。法律によって制せられているということ。

それと同じように、神と私たちとの間に結ばれている契約、16 節にある『ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言って、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。』アブラハム契約です。“アブラハムの子孫”というのは複数形に聞こえるかもしれませんが、原語では「アブラハムの種」です。アブラハムの 1 つの種、1 粒種。単数形です。それはアブラハムの子孫でもあるキリストです。マタイの福音書 1 章の系図には、『アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。』とあります。ひとりの子孫とは、1 つの種とは、イエス・キリストのことです。創世記 3:15 の原福音にも“女の子孫”、女のひとりの子孫、女の種。処女マリヤから生まれるキリストのことです。創世記 13:15、創世記 17:8。単数形の子孫です。アブラハムの子孫、ひとりの子孫、1 つの種です。ですから、複数のユダヤ民族によって祝福されると考えてはいけません。そうではなくて、ひとりのユダヤ人、ひとりのお方、キリストによって祝福されるという契約です。神の祝福、神の約束は、ユダヤ民族という多数・複数を通して与えられるのではなくて、ひとりのユダヤ人、ひとりの救い主を通してもたらされるものだということを知らなくてはならないということです。

17、18 節。『<sup>17</sup>私の言おうとすることはこうです。先に神によって結ばれた契約は、その後四百三十年たつてできた律法によって取り消されたり、その約束が無効とされたりすることがないということです。<sup>18</sup>なぜなら、相続がもし律法によるのなら、もはや約束によるのではないからです。ところが、神は約束を通してアブラハムに相続の恵みを下さったのです。』“契約”という言葉は、「遺言」というふうにも訳されております。口語訳聖書などでは、“契約”というところは「遺言」と訳されております。英語で“契約”のことを testament、古い契約を old testament 旧約聖書です。この testament という言葉も「遺言」と訳すことが出来る言葉です。古い遺言と新しい遺言。でも、それは全く異なるものではないのです。アブラハムへの約束(アブラハム契約)、それは福音であるわけです。良い知らせです。祝福の約束。それはモーセの律法が与えられるその 430 年も前からもう既に神によってアブラハムに与えられたものであったと。従って後から出来たモーセの律法によってこのアブラハム契約、福音と呼ばれているもの、祝福の約束は覆されることはない。法的に神の法においてこの契約はモーセの律法によって覆されることはない、無効になることはない、取り消されることはない、書き換えられることはない、違って解釈されることはないということです。日本の憲法も今改正されようとしております。改憲派の人たちは、一生懸命憲法を変えようとしております。法の解釈。「戦後 GHQ が作った憲法だから、もう今は変えなければいけない。この解釈を変えなきゃいけない。」とか、いろんなことが言われていますけれども。神の憲法は、神の法律は、その時代その時代において、その人々その人々において、勝手に書き換えられたり、勝手に解釈がされるものではない。勝手に無効になったり、覆されるものではないということです。有り難いものです。一度神がアブラハムに約束されたものは、永遠においてそれは有効である。アブ

ラハムに約束されたものは、実はひとりのアブラハムの子孫イエス・キリストにおいても約束されているわけですから、それはアブラハムの血の繋がった民族を超えて、キリストを信じるすべての人に対して有効である。アブラハムと同じ信仰を持つ者は皆アブラハムの子孫である。そして、それはアブラハムだけの血による子孫だけではなくて、キリストにも約束されているものですから、キリストというのは勿論ただのユダヤ人ではなくて神ご自身でもあるわけですから、このアブラハム契約は不思議なことに興味深いことにこれは神が神に対して契約したことでもあるということです。神とアブラハムとの間だけの契約ではないということです。神とアブラハムの子孫だけの契約ではないということです。アブラハムのひとりの子孫イエス・キリストに対する契約、父と御子との間の契約でもある、神同士の契約でもあるということです。神がご自分に対して契約された、約束されたということでもあるということです。これは重要です。なぜならば神は決して約束を破らないからです。だから安心して私たちはこの契約の中に身を置くことができます。神は必ず言われたことを成し遂げます。契約は必ず履行される。約束は間違いなく守られる。破られることは決してないということです。

テトス 1:2『それは、偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった永遠のいのちの望みに基づくことです。』

次に第二コリント 1:20『神の約束はことごとく、この方において(キリストにおいて)「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。』

そしてヘブル 10:23『約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。』私たちが不真実でも彼は真実だと、パウロは言っています。神はアブラハムに約束されました。約束の子を与えると。そしてその約束の子は、海の砂の数ほどに、空の星の数ほどに増え広がると。にもかかわらず、「待てど待てどちっとも神はその約束を果たそうとされない。一体どうなってしまうのか。」アブラハムに対して神は**創世記 15 章**のところで契約を結んでおられます。アブラハム契約は**創世記 12 章**に言葉として実際に与えられましたけれども、**創世記 15 章 5 節**以降を馴染みのない方は読んでおいて下さい。アブラハムと神との間で、当時人間の間で行われていた契約の風習がそこにおいて実践されたわけです。それは 1 頭の動物を使って、その動物を契約者同士が半分に裂いて切り分ける。フィフティフィフティ 50%50%に分けて、そして双方に責任が課せられた上でその 2 つに裂いた生贄の動物の間を契約者同士が、当事者同士が 2 人なりで歩くわけです。そして、歩き終わったならば、契約が切られたということを宣言します。実際に“切り裂く”という言葉が「契約」という言葉の原語です。この契約を破ったならば、あなたはこの動物と同じようにされる。すなわち半分に切られて殺されるということです。契約を切るということは、自分の体を半分に真っ二つに切る、命がかかる重大な意味を持っていたわけです。ただの口約束ではなくて、神との間に交わされたこのアブラハム契約は、神の命までもかかるもの。もしこれを破れば、この動物と同じように真っ二つに裂かれる。違反者には死あるのみ、ということです。この契約を破れば、真っ二つに切り裂かれる。重い契約を結んだわけです。今日はこの契約を破れば、法的には賠償金を命じられたり、若しくは牢屋にぶち込まれるというようなペナルティーはありますけれども、当時はそんなものはなかったわけです。契約を破ったり約束を破ったら、死ぬということです。命がかかっている、だからやたら契約も結べないし、契約を結んだらば命がけで守り抜くということが求められるわけです。その**創世記 15 章**を読んで頂くと、アブラハムは待てど暮らせどその神様が、契約相手が現われないわけです。生贄の動物は真っ二つにされて血生臭いにおいが辺り一面に漂っていますから、そこに猛禽類がやって来るわけです。すなわち血肉を求めてハゲワシだとかハゲタカがやってきては、その肉をつつこうとするわけです。それではいけないと思ってアブラハムは必死になってその猛禽類を追い払おうと頑張るわけですが、何度も何度もやっているうちにだんだん疲れてきて、そしてアブラハムのうちに深い睡魔がやってきます。眠たくて仕方がなくて、ついに神様を待ちきれずに彼は深い眠りに落ちてしまうわけです。そして、眠っている間に神様が驚くべきことをなさいました。日が沈みかかった時にアブラハムは深い眠りに襲われるんですけれども、目覚めてみたらなんとその生贄の動物が火で焼かれてバーベキューになっているではないかと。神が寝ている間に火をもって(それが神の臨在を表しています。)、神様がひとりで生贄のその裂かれた動

物の間を通られたわけです。アブラハムは寝たまま、アブラハムは歩かなかったんです。何がそこに成されたかと言いますと、「この約束は私ひとりで守り行う。この責任は私が100%負うから、アブラハムよ、あなたは寝ているだけでいい。あなたは守らなくていい。守るのは私である。」勿論その含みの中には、その言葉の背後には、アブラハムは破るからということです。でも破られたら神様は困るわけです。祝福したいからです。アブラハムに破られて神の祝福が途絶えてしまう、それはあってはならないことなので、アブラハムに眠りを与えて、アブラハムには何もさせないで神ご自身がすべてを成し遂げる。100%わたしが成す働きによってこの契約が結ばれたと。この契約は切られた。万が一この契約が破られることがあるならば、わたしが死ぬと。これが、神様の成された働きであります。すべては神の働きによるもの。

「じゃあ、私たちにおいては為すべきことは本当に何も無いのですか？成すべきパートは私たちにはないんですか？寝ているだけでいいんですか？」何もしなくて構いません。リラックスして平安を持って待ち望んで、それで充分なんですけれども。でも、アブラハムと同じように私たちも猛禽類を追い払わなければいけない場合があるということも知って下さい。その猛禽類、それは疑いのハゲタカ、それは不信仰のハゲワシ。彼らがやって来たらアブラハムと同じように私たちも追い払わなければならないということです。そのくらいのことは私たちにもパートとして、成すべきこととして神様が与えておられます。

でも、知って下さい。私たちのやることはせいぜいその程度で良いということです。私たちはアブラハムと同じようにただ神様の言われたことをそのまま額面通り信じて、それを行うだけであります。神様はご自身を信じる者、その者を良しとして義と認めて、そしてその者をご自身の偉大な働きのために、ご自身の栄光を現わすために使って下さいます。神様はあなたのような者を、私のような者を祝福し、そして神の栄光のために使って下さるんです。「こんな私で良いんですか？」良いんです。人には3つの生き方があります。3通りの生き方があります。1つは身の程を知って諦めるという生き方です。もう一つは身の程知らずに、身の程をわきまえずに自分の努力で自分の技術で自分のスキルで何でも出来る、律法主義のこです。3つ目は身の程をわきまえて、それでもなお信じて生きるということです。それが信仰義認の生き方です。先に挙げた2つのもの。身の程を知って諦める。そして身の程を知らずに身の程をわきまえずに、自分で出来ると思って生きる。それは実は同じことなんです。身の程を知って諦める。まるで謙虚で謙遜だと思われかもしれませんが、実のところは身の程を知ってしまうのが怖いのです。だからずるいので、先に諦めるんです。「私のようなものは、まだまだ。」なんて言いながら、プライドの塊です。自分が出来ないことを認めたくないから、だからさっさと諦めちゃうんです。「私には出来ない。そんな者じゃないんです。」と。それほど身の程知らずな者はないと思って下さい。私たちは3番目の者でありたいと思います。身の程をわきまえた上で「私はのろわれるべき者です。私はダメ人間、駄目クリスチャン、どうしようもない罪人です。でも私はそれでもなおイエスを信じます。」あなたはもう失敗したくないから「だから私は控えます。」失敗を恐れて同じ過ちを繰り返したくないので「私にはとてもそんなことは出来ません。おこがましいです。そんな能力は私にはありません。」そうやって微塵にもあなたの心の中に思いの中にそういう思いが潜んでいるならば、それは裏を返せば自分に力がつけばいつでも出来るということを言っているわけです。つまり、身の程知らずということです。自分の力にまだ依存しようとしている者の言い方です。失敗を恐れてやらない。「過去において犯した過ちをまた繰り返したくないから、同じ過ちを犯したくないから、だから私はやりません。だから私は神様に用いてもらえない。当然なんです、私はそういう者だからです。そういうことを過去にしてしまったからです。」聞こえは如何にも謙遜ですけれども、実のところは律法主義者です。自分には出来ると思っている節があるのです。出来ないと思っている人はそんな言い方はしません。失敗して当たり前。同じことを繰り返して当たり前だからです。でも、それを開き直って良い意味で認める者は、身の程を本当にわきまえる者は、「主よ。こんな私を憐れんで下さい。私のような者ですが、私はあなたを信じています。そしてあなたは私にこんなにも良くして下さいました。だから私はあなたの望まれるように生きたいだけです。それだけです。自分の望みはもうどうでもいいです。あなたの望みを私は少しでもいいですから関わって、そしてあなたの御心を成したいです。あなたの栄光を現わしたいです。しなきゃいけないからするんじゃないです。それは重荷でも何でもあ

りません。そうしたいんです。したくてたまらないんです。出来ないのは分かっています。でもやりたいんです。あなたにはそれが出来ることを信じていますから。」自由になって自発的にそれを望むわけです。それが信仰義認を経験した者。それが恵みの教理を理解した者のリアクションであります。「主よ、あなたは世の終りまで私と共にいて下さると約束されました。主よ、あなたは私から決して離れず私を見捨てないと約束されました。主よ、あなたはキリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって私を満たして下さい、必要を満たして下さるとあなたは約束されました。主よ、あなたは私に聖霊を与えて下さると約束されました。私はその約束を信じます。私が出来ていなくても、私はあなたの約束を信じます。あなたが出来ることを私は信じているからです。私は出来ません。でも、あなたは出来ます。そのことを私は信じます。」その人の信仰は義と認められます。そして、そのような信仰を主は喜んで下さいます。「信仰がなければだれも神を喜ばせることはできない。」とヘブル 11 章に書いてあります。ですから、私たちは何か行いによって神様を喜ばせて、そして行いによってその報いを得よう、祝福を得よう、聖霊を受けよう、救いを受けよう、という者ではないのです。ただ信じるだけです。今日はこれで終わりたいと思います。3 章の後半をまだ残しておりますけれども、是非しっかりとこの信仰義認の教理、恵みの教理を押さえて頂いて、そして愚かなガラテヤ人にならないで欲しいと思います。愚かな信州人にならないで下さい。愚かな MGF のメンバーにならないで下さい。私たちは単純明快に、ただイエスキリストの「完了した。」という宣言、その言葉を聞いてそれを信じる者たちであります。信仰のみ、恵みのみ、聖書のみです。そして私たちは神の栄光しか求めない者です。だから自分が出来なくても良い者たち。出来ていなくても全然良いんです。神様が出来れば、それで良いんです。自分になっても、それで良いんです。イエス・キリストがすべてを成し遂げて下さったからです。聖人君子にならなくても良いんです。なぜならばイエス・キリストが文字通りのただ唯一の聖人君子であるからです。だから私たちはその方に賭けます。その方にすべてを委ねます。その方にすべてを任せます。そしてその方のうちに私たちは憩うことが出来ます。安心して解き放たれて、もう重荷ではないんです。もう自由です。ただ信じるだけで良い。そして私たちは信じて、そうしたいと願う者に変えられました。「聖書に書かれている通りにしたい。神様に喜んで頂きたい。神の栄光を現わすために、あれもしたい、これもしたい。」誰から言われたのでもなく、人からプレッシャーを受けたわけでもなく、クリスチャンだから教会員だからじゃなく、あの人やっているからこの人がやっているからではなく、イエス・キリストに出会ってしまったからです。もう恵みを経験してしまったからです。そうせざるを得ない。ここまで愛されているならば。こんなにも愛されているならば。十字架のキリストに出会ったから。ここに愛があるから。呪いはすべてこの方が引き受けて下さったから。だから私は応答したいです。責任じゃない。responsibility じゃなくて response として、自由に自発的に応答したい。それだけです。そのようにして是非賢い信州人の皆さん、MGF のメンバーの皆さんは生きて頂きたいと思います。義人は信仰によって生きるんです。こんなに良い知らせは他にはありません。キリスト教以外は皆行いによって生きようとしてます。それは呪いの人生でしかありません。宗教と名の付くものだけじゃなく、自分を神とする人たちの生き方、神など必要ないとする者たちの生き方、イエス・キリストが唯一の救い主ではないと主張する人たちの生き方はすべて呪われるべきもの、呪いしか待っていない、自滅しか待っていない、そんな惨めな生き方でしかありません。良い人なんかじゃないんです。最悪の状態にある、最悪の運命を辿っていく人たちでしかないということです。彼らは良い知らせを聞く必要があります。何もなくて良いんだということ。そして、信じるだけで良いということです。是非伝えて頂きたいと思います。